

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nskk.org

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



《イースターメッセージ》

新たな始まりの朝

ヨハネ 植松

功



の時、親に隠れて銃を持ち出

「こんなはずではなかった」ということがあります。

最愛の人の突然の死。思いがけない難病。取り返しのつかない事故。人間関係のまさかの破綻。安息のない家庭の景色。秘密や嘘に覆われた虐待や暴力や裏切り。その被害者あるいは加害者であるわたし。そしてアルコールやネット世界への依存。わたしの内にも外にも、そんな景色が広がっています。どれも、もし可能ならわたしの人生から消しゴムで消してしまいたい現実です。圧倒的な闇と絶望から立ち直ることは可能なのでしょうか。

米国の公共放送に「わたしはこれ信じて」という5分間のラジオ番組があります。著名人から無名の人間まで、「あなたは何を信じるか」という問いに簡潔に答えるのです。その番組のある男性の話です。「12歳

がいることを。わたしは不

条理の中で一人ぼっちではないのだと。わたしが何を信じていたか？ わたしは詩の力を信じている」（ちなみに彼は現在大学で文学の教授をしている。）

「こんなはずではなかった」という現実、わたしもそれから逃げずに、勇気を出してそれを直視し、それに言葉を与え、あえて表現



復活 (聖マーガレット教会の十字架の道行きより)
画：若本政一・ラルシュカナの家

すること
に招かれ
ていると
気づきま
した。し
かし、現
実を直視

するのとは何と難しいことでしょうか。言い訳も偏見も、個人的な好き嫌いも、怒りや苛立ちも、それらすべてをきっぱりと脇に置いて、何が真実なのかを勇気を出して直視し、それを澄み

切った光の中で表現してゆくこと。きつと詩編も福音書も、そんな葛藤を経て記された証しなのかもしれま

せん。

イエス様の十字架への歩みはすべて「こんなはずではなかった」というわたしの現実に寄り添うものであったのです。「なぜわたしをお見捨てになったのですか」と御父に叫ぶほど、わたしの絶望に共に立ってくださいました。そして復活されたイエス様は「こんなはずではなかった」と落胆するわたしたちに、その現実を直視するようにと招き、「わたしはそういうあなたを限りなく愛し、そのあなたを世界に遣わしたいのだ」と、すべてを赦し、すべてを支え、「さあ朝の食事をしなさい」と、新たな喜びと平和の食卓に招き入れてくださっているのではないのでしょうか。

イースターの朝、このキリストに心から出会う喜びが待っているとわたしは信じます。すべてを赦され、すべてを抱きしめられる。そんな新たな始まりの朝。
(聖マーガレット教会信徒)

特集 病と癒し

イエスは多くの人々の病を癒す働きを行った。しかし病で苦しむ人は今も絶えることがない。私たちはその現実をどう捉えたらよいのか、今回3人の司祭達にそれぞれの立場で「病と癒しと信仰」について、寄稿いただいた。

病と信仰

司祭 菅原 裕治



「説教中に死ねれば本望」など時々牧師は口にします。実際説教中に心筋梗塞となったわたしの実感では、そのような事象は、単に教会に迷惑をかけるだけです。

2011年8月14日主日聖餐式の説教中、胸に強い痛みを感じました。その痛みが心筋梗塞の放散痛だと知る由もないわたしは、礼拝後、牧師館で横になっていました。しかし、聖パトリック教会の皆さまが大変心配くださり、救急車では間に合わない可能性があると、信徒の奥山義明兄の車で、立川の災害医療センターへ運んでくださいました。病院到着後、心筋梗塞であり死ぬかもしれないと医師から告げられましたが、あまり動揺しませんでした。それで

も50歳まで生きてから十分かと自分を納得させようとしたとき、49歳11か月と書いてあるカルテが目に入りました。神様に、死の意味は、人間が決める事柄ではないと示されたようでした。

その後、象に踏まれるが如くと表現される物凄い痛みを伴う手術の後、絶対安静で10日はCCUにいたそうですが、今でもその期間が1日だったという記憶しかありません。その間、聖パトリック教会の皆さまをはじめとして、沢山の方々にお祈りいただきました。その中でもっとも祈り支えてくれたのは、家内の真美であったと思います。その年、真美は元旦に父親が逝去、3月11日東日本大震災で故郷被災、そしてわたしがCCU入りだったからです。わたしが病から助かったことは、現代医療の力が大きく、それ自体が救いではないと思います。しかし、多くの

方々の祈りによって支えられたことも確かだと思えます。

一般病棟に移ってから、冠動脈が詰ったため筋肉を通し、必死に血液を送ろうとしている自分の心臓の姿を見ました。その姿に、わたしは愚かな人間（わたしですが）を支えてくださる神様の愛を感じました。

ほとんどの文化において、老、病、死は、不幸の代表であり、死は必ず訪れる一点です。そしてこの一点をどうとらえるかが信仰に関わる事柄です。この一点をすべての終わりと思えば、老も病も単なる不幸に他なりません。

創世記6章3節に、「主は言われた。『わたしの霊は人の中に永久にとどまるべきではない。人は肉にすぎないのだから。』こうして、人の一生は百二十年となった」とあり、ここで人間の寿命が決まります。つまり主なる神様が天地を創造されたとき、そこに死はありませんでした。そこにあるのは、すべてを創造された神様とすべての被造物との信頼関係だけでした。それが本当の平和であり、それを保つことが神様の似像性を

持つ人間の生きる目標です。

わたしは、心臓機能の約4割を失い、いわば病による急速な老いを通して、今までできていたことがかなりできなくなりました。しかし、病と老を通して、どれだけ多くの方々に支えられ、生きてきたか、また今を生きているのかという自覚を、文字通り心に刻むことが出来たと思っております。健康な生活は大切ですが、死がすべての終わりではないと信じる時、老と病は、単なる不幸ではなくなります。なぜなら、すべての被造物が本来の世界、愛が満ちた世界に戻るための一歩になると思うからです。

喫茶去・きつさこ

司祭 佐々木 道人



3月3日の朝日新聞の「折々のことば」に次のような言葉が紹介されています。

「お茶を飲むしかありません。ですから私の対話にはお茶が必要です」『がん哲学外来へようこそ』 病理医 樋野興夫 著・新潮新書

も、その人の心や魂の状態に目を向けておられたことが窺われます。

ヨハネによる福音書9章にある生まれつき目の見えない人をいやされる話では、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」(3節)と、罪の問題は関係ないかのようにイエスさまは語っておられます。

むしろ、神様の業が現れることを、そしてこの人の魂が成長していくことをイエスさまは、願っておられるような物語の展開になっています。また、やはり、ヨハネによる福音書5章では、38年間もの間、病気に人に、わざわざ「良くなりたかいか」(6節)とイエスさまは尋ねられています。ここでも病気の人の心がどちらに向いているか、何を気にしているのかを尋ねているイエスさまの姿が描かれています。

イエスさまの服にこっそり触って病気をいやしてもらった、12年間長血を患う女の人の話(マルコによる福音書5:24-34)では、わざわざ、この女の人を探し出そうとされました。そして、イエスさま

この背景を示す文章を紹介する。

「20代、30代の若さでがんになった人が目の前で涙を流し、『死にたい』『もう生きていたくない』などと口にすることがあります。すると私は下を向いてお茶を飲みます。そこで何を言っても、回答になるとは思えません。励ましたり、論じたり、お説教をしたりすることは全く無駄です。無理やりそういうことを口にしても、相談者を傷つけるだけです。お茶を飲むしかありません。ですから、私の対話にはお茶が必要です。」

この記事を読みながら「喫茶去・きつさこ」という禅語を思い出した。この禅語から「まあ、お茶を一杯でも」と声をかける主と客の姿が浮かんで来る。特に以前働いた聖路加病院のチャプレン・ルームでの出来事が。その部屋は外来病棟の只中にあるので、担当医からがんの再発の宣告を受けた直後の人がやって来る。丁度大斎節で日課が「エロイ・エロイ・レマ・サバクタニ・わが神わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」(マルコ15:34)とい

はこの女の人に「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。」(34節)と語りかけておられます。ここでもイエスさまにとっては病気がいやされることそのものよりも、この女の人が、どういう気持ちでいるのか、病気以外の心の課題を抱えていないかをイエスさまは心配されているように思えます。

このようなイエスさまの姿に今も、わたしたちは励まされ、促されます。病院でチャプレンとして働く時に、一緒に働いているお医者さんや看護師さん、他の様々なスタッフたちと共に、あるいはそれぞれ立場から、患者さんに、そして時にはその家族や親しい人にも関わっていきます。病気が治るようにはもちろん思っているわけですが、それ以上にその人の心が、魂が何を求め、何処へ向かおうとしているのかにも関心を持っています。神様の業がどのように私たちの人生に表され、それをどのように私たちが受け取っていくのか、ということに、と願いながら歩み続けたものだと思っています。

う箇所を共に読んだ彼は「聖書の中で、この言葉だけは本当だ」と私をまっすぐ見て、つぶやいた。

また可愛い盛りの子にがんが発見されたという若い母親が訪ねて来る。彼女の眼は深い井戸のようで、全ての光を吸い取ってしまう穴の様だった。そしてポツリポツリと語るうちに、涙が溢れポツリと落ちる。すると彼女の瞳に、光が宿り、きらめく。

さらに、親を看取った直後の家族がスタッフによる遺体の清拭のため、病室から出されロビーで待つ間、招いたのもこのチャプレン・ルームだった。その部屋には、いつもポットに湯が沸いている。それを湯のみに注ぎ、急須に茶葉を入れ、間をおき湯を注ぎ、ゆっくり器に茶を満たす。この一時の静寂が大変貴重に思えた。差し出す小さな茶碗を彼らが、両手で受けて一口、また一口飲む。そして一言「ああ美味しい。」と。

これで何だか大丈夫だという思いがしみてくる。「喫茶去」である。

患者さんだけでなく、元氣な看護大生もやって来る。茶

の用意をしながら菓子などすすめると嬉しそうにほおぼり一言。「チャプレンはいいなあ。いつ来ても暇そうで。」

半分絶句し、苦笑いしながら、それでもこちらもなんだか、ほっとさせてもらおう。

紹介した「がん哲学外来へようこそ」のドクターに次のような言葉があり納得。

「私自身が一つ心がけているのは『暇げな風貌』です。人間だれしも、忙しそうにしている人に心を開いて会話しようとは思わないものです。」

ふたたび「喫茶去、まあ、お茶を一杯でも」という言葉をかみしめる。私達は常に何かに捕らわれて生きている。言葉に、思いに。人に。その奴隷状態から自分を取り戻し、今できることを、しっかりと生きているを取り戻せたらと切に思う。だれか、「まあ、お茶を一杯でも」と、声をかけ、もてなしてくれる方がいたらなあ。

イエスの癒し

司祭 上田 憲明



イエスさまのいやし物語がい

退職に際して

司祭 神崎 雄二



教会に初めて連れて行かれたのは、小学校に入ってから

が肯定される場だったからである。大学進学

神戸に出て予備校に行こう

もなくて、戦後の教会ブームで、兄や姉がこぞって姫路

としたが、下宿代も予備校の授業料も、食費すら不足した

定年を迎えて

司祭 前田 良彦



頭の中で

は予想していた定年が目の前に迫ってきた

神学院卒業後、聖教主教会と深川勤労青年センターから

聖書の中でポイントになる言葉が幾つもあるけれど、かねてから気になっていた言葉

シリーズ 外国人の

吉村 誠司

「ヒューマンシールド神戸」代表



1965年8月に三重県桑名市で生まれ、

ネットワークと結んでイラクに入り、その活動を進めながら、前述の代表団体を立ち上げ

ンプやアウトドアの専門家などが、ネットワークで発信して集まってきました



「パキスタン地震」などの海外被災地にも赴いています

Q 最初に災害現場に入る時に苦勞する事は？

3・11の「東日本大震災」の折には翌日現地入りし、最初は人命救助

そこが最も苦勞する所で、個人持ちの3台の大小の重機

Q 自身の経歴は？

その後神戸に移り住み、「神戸元氣村」の副代表として8年間活動

「阪神」後は、イラク戦争を止めさせようと世界中

Q スタッフはどのようにして集め、もしくは集まってくるのですか？

「阪神」の時に知り合った仲間や、重機を扱う仲間

「真砂土」と言う花崗岩が風化したものらしい地質もあり

私たちの教会 [3 1]

ようこそ聖マーガレット教会へ



昨年2月、私たちの聖マーガレット教会に塚田重太郎司祭が赴任されました。優しく元気な和代夫人と、明るくたくましい4人の子供達と一緒に来られたので、聖マーガレット教会は大人はもちろん、子ども達も大いに沸き立ちました！

そして1年が経つ今、いくつかの動きが聖マーガレット教会に起こっています。

スコットランドでの研修を終えた塚田先生から提案されて、昨年末までに計20回ほどの勉強会がありました。

今年に入ってから読書会が始まり、また「新しい人を教会に連れてこよう！」という思いから『ひつじカフェ』が毎月1回、第2金曜日の18時から開店しています。

そして、ここでご紹介したいのがユース聖餐式です。青少年のための聖餐式と、話し合いの時間を目的として、最初が聖餐式、2箇所の聖書朗読、3つの聖歌と短いメッセージ(説教)から成り、全体で45分くらいです。メッセージの中で

は毎回、その日のテーマが示されます。

聖餐式が終わると、お茶を飲みながらのショートブレック。その後、小さなグループに分かれて、その日のテーマに関するディスカッションを25分くらい。その後、各グループで話し合われた内容の分かち合い。最後にはグループの1人が祈って終わります。

青少年だけでなく、大人(40・50・60代)も参加しながら毎回15〜20人くらいが集まります。

ユース聖餐式の楽しさは、まずは聖餐式です。いつもの礼拝とは異なり、一つの丸パンを使い、手でちぎって主イエス・キリストの身体を頂きます。また、皆がチャリスから美味しいブドウジュースを用いて主イエス・キリストの血をゴクゴク頂きます。

ディスカッションの時間も楽しみです。みんな(小学生から大学生まで)が、自分の信仰について考え、言葉にして話し合います。もう一つの楽しみは祈り

の時間です。今、何を祈りたいのか、祈って欲しいかをグループの皆に話し、そのグループの1人が、皆の祈りを一つ一つ祈ってくれます。その時間こそ、心温まる時間です。そうそう！音楽も楽しく、塚田先生のギター伴奏で歌います！今のみんなのお気に入り「Walking with Jesus」です。

青年達がかけがえのない10代、20代の時に、共に信仰を育て合う大切さを実践しています。

ですから、どうぞみなさんも聖マーガレット教会のユース聖餐式に来て下さい！

朝、起きれなくて礼拝に出られなかったあなた！昼間に用事があった教会に行けなかったあなた！大丈夫です！聖マーガレット教会のユース聖餐式は第2・第4日曜日の17時からです！

神様の愛をいっぱい受けて、翌日から仕事や学校で、クリスチャンとして生きる力に満ち溢れるユース聖餐式に、是非お越しください！ Walking with Jesus! (マリア小貫 美樹)

《信徒リレーエッセイ》

世界宗教者平和会議
東京聖マリア教会
岩浅 紀久

今年1月23日に、立正佼成会の法輪閣大ホールを会場にして、世界宗教者平和会議が開かれた。この会議は、世界の宗教者が力を合わせて世界を平和に行こう。神から授かったこの地球を守るために、教派を超えて世界の宗教者が一致団結しようという会議です。今回は、その日本会議で、国内の仏教、キリスト教、イスラム教、始め、多くの宗教、宗派からの参加でした。日本聖公会からは、植松主教と大阪教区の岩城司祭の2名が参加され、岩城司祭はパネルディスカッションのパネラーとしてもお話しされました。

私は聖公会からでなく、世界連邦政府協議会からの参加です。この団体は宗教ではありませんが、この平和会議のメンバーになって

今、宗教も政治も、自分の壁を取り払い、一致団結して地球を守る活動へ向かうことが大切でしょう。

シリーズ 宣教への取り組み⑥

英国聖公会の宣教、最近の歩み その3

司祭 塚田 重太郎



前回、衰退を続けてきた西洋の聖公会が、消滅を迎えようとしていることを取り上げました。同時に、世俗化と教会の衰退に必然的繋がりがあられるのではなく、「新しいキリスト教」が衰退と直結していることを指摘しました。

今回、教会が生き残り、そして再生することを願うなら、①「新しいキリスト教」と手を切り、②「キリスト教宣教とは教会になることだ」ということを訴えて、このシリーズを閉じるつもりでおりましたが、今号に収まり切らず、あと1回か2回、続きを書かせていただくことになりました。

「新しいキリスト教」は様々な姿を取って現れては消えていきますが、今回の寄稿で私が取り上げるのは、1990年代になって日本でも知られるようになった「ミッシオ・デイ」(神の宣教)と呼ばれる「新しい宣教の神学」です。

この「新しい宣教の神学」は、1991年に出版されたデイヴィッド・ボッシュの『宣教の革新—宣教神学におけるパラダイムシフト』という著作が世界中の神学校で宣教論の教科書として使われるようになった結果、教団教派を超えて、あらゆる教会で、「もっとも正統的で三位一体論的な宣教神学」として受け入れられるようになりました。

ボッシュは『宣教の革新』の中で「ミッシオ・デイ」を①カール・バルトの神学に養われた、②真に三位一体論的な宣教論であり、③教会中心の宣教理解から神中心の宣教理解への大転換である、と主張しました。これがそのまま「規範的物語」として受け入れられるようになり、ほとんど誰も、ボッシュの主張の真偽を検証しようとしませんでした。私は、この「新しい宣教の神学」に対して懐疑的でした。

調べれば調べるほど、この

「神学」が、教会を内側から破壊することが明らかになりました。2010年、『寄留者』(原題は Resident Aliens) という著作の中で、ハワード・ウィリモンが、リチャード・ニーバーの『キリストと文化』に対する辛辣な批判を展開しているのを読んだとき、私はリチャード・ニーバーの「文化の変革者としてのキリスト」と「神の宣教」との間に、ある種の並行関係を見て取りました。私は博士論文の研究テーマとして、ハワードの仕事を依拠して「神の宣教」を解体し、「宣教とは教会になること」であることを示すことを構想していました。ところが予備研究をしている段階で、すでにジョン・フレットという人が、「ミッシオ・デイ」の解体作業を完了していたことを発見しました。

ここでフレットの議論を詳細に紹介することは不可能ですが、一言で言えば、彼は、ボッシュが『宣教の革新』の中で「神の宣教」について語っていたことはすべて嘘であったことを、反論の余

地なく示した上で、この「宣教神学」の正体を暴露しました。バルトにとって、教会は福音を宣べ伝え、人々にイエスは主であると告げる宣教共同体です。教会は光に従うようにと、闇の中に住む人々を招きます。バルトにとって教会になることが宣教です。教会中心の宣教は、バルトにとってまったく問題ではなく、「三位一体論的宣教論」を展開する必要性など感じていませんでした。

では「ミッシオ・デイ」の「三位一体論的」流れはどこから来るのかということになるわけですが、その出所は1952年にドイツのウィリンゲンで行われた会議のために用意された「ノース・アメリカン・レポート」、あるいは「なぜ宣教なのか？」と題された準備書面でした。この文書を起草したのは、驚くべきことに、『キリスト教と文化』の著者自身でした。このレポートは、バルトのキリスト教中心の、そして教会中心の宣教を隅に追いや

り、無きものとするために用意されました。バルトのキリスト中心の神学は「キリスト唯一主義」(Christomonism)であり、「過度にキリスト論的」で「異端的」であるとして退けられ、代わりにリチャード・ニーバーの主張する「三位一体主義」が対置されました。ここで注意すべき点は、ニーバーの主張する「三位一体主義」は、正統神学の三位一体論とは全く関係がないということです。彼は「三位一体の教義と教会の一致」という論文の中で、キリスト教とは、「父だけが神である」、「子だけが神である」、あるいは「聖霊だけが神である」と主張する「単位論的異端」の緩やかな「連合」であって、「三位一体」というのは、この三つの異端をその下に収める大きな傘なのだと言張っています。

バルトにとって三位一体とは神の存在そのものであり、神の本性そのものであるのに対して、リチャード・ニーバーにとつての「三位一体」は、対立する真理主張を「共存させる」ための「装置」に過ぎないわけです。

(聖マーガレット教会牧師)

BSA新体制発足

日本聖徒アンデレ同胞会（BSA）の総会が2月24日（土）に東京教区会館で開かれ、任期満了に伴う役員選挙で、新しく14名の理事と2名の監事を選出した。続いて開かれた理事会において、次期会長に足立征三郎兄（聖マーガレット教会）、副会長に木島出兄（阿佐ヶ

谷聖ペテロ教会）と尾崎茂雄兄（横浜聖アンデレ教会）を選出した。任期は2年。総会では、2017年度の事業活動報告および同会計収支報告を承認した。



BSAとは

BSA (Brotherhood of St. Andrew) とは、「兄弟のシモンをイエスのところに連れて行った」（ヨハネによる福音書1:42）使徒アンデレの名にちなんでつけられたもので、アメリカで生まれた。アンデレのように「二人が一人を」教会に連れてきて「御国の拡張」をめざす運動を実践してきた。

1927年に設立した男子信徒の会で、昨年創立90周年を迎えた。また昨年は、ポール・ラッシュの生誕120周年に当たり、彼が設立したキープ協会が中心となって記念コンサートや「わが人生、日本の青年に捧ぐ、ポール・ラッシュ物語」展など各種の記念イベントを開催した。

BSAの本部は東京教区会館内にあり、現在東京、横浜両教区を中心に全国に203人の正会員と81人の賛助会員を擁している。さらに日本聖公会の植松誠首座主教を名誉会長、

各教区主教を名誉副会長に委嘱しているほか、全国に16ある支部の関係教会の牧師をチャプレンに委嘱している。東京教区には、東京聖三一教会支部、聖ルカ礼拝堂支部、池袋支部、東京聖マルコ教会支部、神田支部、南町田（真光教会）支部の6支部の他に、個人会員として正会員37名、賛助会員29名がいる。会員はそれぞれの教会で「祈祷と奉仕」をモットーに、礼拝や教会の諸活動を通じて奉仕活動に励んでいる。BSAでは、創立90周年を記



伝道者ビリー・グラハム氏（2月21日に99歳で死去）に対しアングリカ指導者から弔意（アメリカ）

念して記念誌『希望のBSAをめざして』を編集しており、3月末の発行を予定している。BSAについてのお問い合わせは、東京教区会館2階のBSA本部または電話：03（3432）4325までどうぞ。

（BSA理事 吉松英美）

アメリカ聖公会マイケル・カーリー主教「グラハムの伝道は歓迎の心に満ち、深く愛に根ざしていた。イエスの道そのものだった。エキュメニカル運動が生じる以前から、彼の集会はエキュメニカルだった」／ウェールズのジョン・デイヴィーズ大主教「彼は偉大なウェールズ・リバイバルの説教者達を彷彿とさせる真のキリストの伝道者だった」／シドニーのピーター・ジェンセン前大主教「私は15歳のときビリー・グラハムの集会でクリスチャンになった。彼が聖書を説教するのを聞いて、私はイエスに人生を捧げることを

表明するために彼の招きに応じて前に進み出ることを止められなかった」（2月22日）

スコットランド聖公会、初の女性主教按手（スコットランド）

マーク・ストレンジ首座主教は管区初の女性主教アンネ・ダイアーをアバディーンの聖アンデレ主教座聖堂において聖別した。アンネ主教は昨年11月の管区総会でアバディーン・オークニー主教として選出された。1月に18人のアバディーン教区の聖職者がアンネの主教選出を公開書簡で批判したのに対し、マーク首座主教は「ダイアー司祭の選出は主教達の深い祈りと沈思の

期間を経て為された。主教達は選出において聖霊に導かれたことを信じており、ダイアー司祭もそれを確信している」と反論した。論争はアンネ主教の結婚観や性問題に関する見解にも及ぶ。彼女は「多様な性を許容することが主教の役割であり、どのような考え方の人も歓迎する」と述べている。この日、大雪で交通が混乱する中、主教座聖堂は「新主教を迎えよう」という呼びかけに集まった人々の喜びで満たされた。（3月1日）

次回 ペンテコステ号

5月20日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（三十六）

1. 同じ立場？

信徒「牧師さんは、みんな教区から派遣されるんですか？」
 牧師「はい、そうです」
 信徒「それでは、私と同じ立場ですね」
 牧師「あなたとですか？」
 信徒「だって私も、派遣社員ですから…」

2. 泣く理由

牧師「今日、礼拝の時に泣いておられましたか、先月亡くなったご主人のことを思い出して泣いていたのですか」
 信徒「いえ、1年前に亡くなったペットのことを思い出したら、つい…」

3. 新しい箴言

信徒A「聖書に『人はパンだけで生きるものではない』という言葉があるけど、外交問題を考えると、こんな言葉が浮かんでくるよ」
 信徒B「…外交問題って、どんな言葉？」
 信徒A「国はパンダだけで仲良くなるものではない」